へもちてくだりたりけるを、とりにやるとて、はやまといふ鳥をかはりにやりたりければ、侍從おぎのはををくるとて、鳥につけ侍りける、

すゞしさはは山のかげもかはらねどなほふきをくれ荻のうはかぜ、このうたをかんじて、やがて又おぎのはをかへしやるとて、宮内卿、

これも又秋のこゝろぞたのまれぬはやまにかはるおぎのうはかぜ

後久我太政大臣家におもながといふ鵙の有けるを、家隆卿所望せられけるを、おとゞ玄ばしつき見給ひければ、よみてつかはしける、

いかにせん山鳥のをもながき夜をおひのねざめに戀つゝぞなく、すなはちつかひにつけてをくられけり、さだめてかへしありけんかし、たづねて玄るべし、

〔土御門院御集〕鳥名十首

このうちにまだすみなれぬひえ鳥は心ならでも世をすぐす哉

〔親元日記〕文明十三年四月六日庚戌、土岐殿より貴殿へ鵙一まゐる、荷替、但號二白頭公一者歟、御返事あり、八日壬子、土岐どのへ鵙之御返事被レ進レ之、

〔親俊日記〕天文七年五月二日甲戌、道運島鵙貴殿へ懸二御目一之、三日乙亥、細川殿以二佛地院一種々御所望之間鵙進之、道運以二太刀一佛地院禮□□□　五日丁丑、就二島鵙之儀一、細川殿御□□アリ、佛地院ヨリ大田使ニ來、

〔田舍莊子上〕鵙鶺得失

鵙小鳥共をあつめて謂て云、汝等畑の作物につき、又は庭の菓を喰ふに、いらざる高ごゑをして、友を呼びさわぐによりて、人其來り集るを知て、網を張り黏を置也、我冬になり山に食物なき時は、人家に來りて椽先にある南天の實を喰へ共、亭主知る事なし、あまりをかしさに、立ざまに大